



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究抄録(2022.4)令和2・3年度:43

急性期病院に転入する維持透析患者用アセスメントツールの有用性

佐々木央子

急性期病院に転入する維持透析患者用アセスメントツールの有用性

外来ナースステーション透析センター 佐々木央子

【目的】

A病院では手術や検査のため転入する維持透析患者が年間約200名おり心血管系治療患者が65%を占めている。看護師は心血管障害など高リスクな患者の側で透析中の循環動態変動に備えモニタリングし、転入時に患者の全体像把握と分析が必要である。しかし平均在院日数11.7日の短期間に正しく透析看護を行うことは容易ではない。そのため透析患者の既往、検査データ、透析中血圧値情報等を踏まえた維持透析患者用アセスメントツール（以下ツール）を作成し活用している。このツールが血圧低下を予防し安全な透析看護の提供に有用であるか明らかにすることを本研究の目的とした。

【方法】

2016～17年入院のツール未使用群138人と2018～19年入院の使用患者群135人の診療録より以下の6項目の有無を調査し統計的に比較検討した。血圧低下により透析続行が生命にかかわる状態の指標1.除水中止2.返血3.急速補液投与。異常の早期発見に繋がったとする指標4.血圧低下に伴う不快症状5.意識消失6.血圧低下前の医師報告。調査前に施設の倫理審査の承認を得た。

【結果】

ツール未使用群に比べ使用群は除水中止及び血圧低下に伴う不快症状を来す割合が優位に低かった（ $P<0.05$ ）。項目2及び6に関しては両群に優位な差を認めなかった。項目5に該当する患者は両群に認めなかった。

【考察】

本調査からツールの使用はアセスメントに繋がり急性期病院における安全な透析提供のための看護に有用であったと考える。尚、急速補液処置や医師への報告の有無はツールの使用に関連性がないことが検証された。以上のことから透析中の異常を見定め専門的な視座でフィジカルアセスメントを実践できるツールへ改善することや教育体制の強化が喫急の課題である。

【結論】

本研究の結果ツールの有用性と透析看護師のアセスメント力強化の課題を明確にした。